

コロナ感染防止においての葬儀、法要のあり方

(私製ガイドライン)

新型コロナウィルスに感染しで身内を亡くされたご遺族(コロナご遺族)が、濃厚接触者であることから見舞うこともできない、ご遺体に対面もできず、玄関前に置かれたご遺骨を受け取る光景を、私だけでなく皆様もテレビで目にされたことでしょう。

「死を受け入れられない」

「自分の気持ちを誰にも話せない、聞いてもらえない」という辛い気持ちでいます。

「普通のお葬式ができればけじめがつくが‥」
等々

コロナご遺族は、闘病を支える→看取る→弔うことが全くできなかつたことに心を痛めているようです。

また、無料仏事相談に、

「コロナ下において法要は先延ばしたほうがいいのか」

「葬儀は取りやめたのだけど、初盆はどうしたら」

「葬儀はやらないほうがいいのか」

というような弔い、供養をしたいけどどうしたらいいか困惑している方からの相談が寄せられています。

こんな時こそ、仏教、仏様の教えが出番なのに、コロナご遺族だけではなく、コロナご遺族でない方々も感染リスクを考え、葬儀、法要をどうしたらいいのか困惑されています。

葬儀、法要は亡くなった方を弔うことだけではなく、残されたご遺族が生きるための仏様の教えをいただく、仏縁する場、ときでもあります。

今、新型コロナウィルス出現によって生活環境が一変しています。何十年と続いてきた当たり前、当然だと思っていた生活様式が急変させられているのです。

今まで良かれとされたもの、行動が真逆にだめとされてしまっているのです。

仏様の教えに、「この世は無常」、「常」ということは「無い」という教えがあります。

何十年以上続いてきたのだから、そのまま変わらないで続くということはないということです。

私たちは「ご縁」で生かされているということです。

ご縁、つまり「今の状況」において生かされているということです。

ご縁は常でなく変わるものですから、今の生活様式がそのまま続くことはないのです。

大地震、台風等による自然災害で被災した多くの方々が、「一瞬にして家族、家、街を失った。当たり前、当然ということはないということ」がわかった。1日いちにちを頑張って生きていくしかない」と語っています。

まさに、仏様の教えを実感しています。

このコロナの感染リスク防止を最重要視しての生活様式において、私が考えている葬儀、法要をどのように行えるのか、どのようにすればいいのかをお伝えすることで、故人を偲ぶ、弔うとともに仏縁することで仏様の教えを大変な世の中を生きる支えとしていただければ幸いと思っています。

仏様の教えでは、「苦を取り除くことはできなくても、苦でなくする」であることから、コロナウィルスの恐怖は取り除くことはできなくても薄めることができると確信しています。

医者ではない私が言うのはおかしいと思われますが、私たちは「病は気から」と言われているように、心の持ち方、気分、精神状態が悪いとストレスから身体に支障をきたします。

ストレスは体に良くない、コロナウィルスに対する免疫力が落ちてしまうのではないかと思います。

仏様の教えでは、「病気は治すのではなく、治める」としていますが、そのことは「コロナウィルスと共生して生きていく」ということではないでしょうか。

コロナウィルスと共生するなかでの葬儀、法要のやり方はあると考えています。

この世での人生は寿命があり、誰しもが生まれたからには人間としては最後、死を迎えます。冠婚葬祭において結婚式は何年でもずらせますが、葬儀はそういうわけにはいきません。(火葬をすませて後日お骨を安置しての骨葬というかたちで後日葬を行ことはできますが)。

ですから、簡単に葬儀、法要をあきらめるのではなく、感染防止策をとったうえで可能な限りしていただきたいです。

既に皆様方におかれてもいろいろと考えられていることと思いま
すが、私の私見に過ぎませんが、参考になれば幸いです。

令和2年6月2日現在

N P O 法人永代供養推進協会代表理事
小原崇裕

記

5月26日に全都道府県に対して国からの緊急事態宣言が解除されました。解除前、解除後も行い方に当たっては、三密(密集、密接、密閉)を避ける対策のうえで法要、葬儀を行うことは言うまでもありません。

参加者は

- ・マスク持参、着用
- ・入口でアルコール消毒液による手指消毒を厳守
- ・参加者の着席の間隔を1メートル以上確保する
- ・必要以上の会話、大きな声、横向く、後ろ向く、対面での会話を避ける
- ・会食は避ける
- ・焼香時は並ばず(列を作らず)1人ずつ前に出る。ただし、お堂、式場が参加者人数に対して十分な空きスペースがある場合は、ソーシャルディスタンス2メートル以上を確保して並ぶ。
- ・平熱より熱がある、風邪気味、息切れ、倦怠感、嘔吐、下痢、味覚や嗅覚障害があるなど体調が悪い場合は参加を控える

※外出に駅、銀行、郵便局、スーパー、飲食店、マンション、駐車場等でのタッチパネル、現金、商品などあらゆるところで手で触れるものでウイルスに接する可能性があります。

ですから、皆様方1人ひとり(参加者だけではなく導師、僧侶、スタッフ等全ての人)が外出後帰宅したら「手洗い、ウガイ」を厳守しなければ、これらのこととは無意味になります。

導師、僧侶は

- ・手洗い、手指消毒を厳守
- ・読経時以外の喪主あるいは施主との挨拶、参加者に対して法話時はマスク着用。(ただし、お堂、式場が参加者人数に対して十

分な空きスペースがあり、ソーシャルディスタンスの2メートル以上を離れて法話をする場合はマスクを着用しなくてもよい)。

- ・平熱より熱がある、風邪気味、息切れ、倦怠感、嘔吐、下痢、味覚や嗅覚障害があるなど体調が悪い場合はお勤めを控える。

※新型コロナウィルス感染症対策専門会議で提示した「新しい生活様式」で、各場面別において「冠婚葬祭などの親族行事」では、「他人数での会食は避けて」と「発熱や風邪の症状がある場合は参加しない」とされています。「症状のある方の入場制限」として、発熱や軽度であっても咳・嘔頭痛などの症状がある人は入場しないように呼びかけることは、施設内などにおける感染対策として最も優先すべき対策である。また、状況によっては、発熱者を体温計などの特定し入場を制限することも考えられるとしています。

お堂、式場は

- ・戸、ドア、窓を開けておくなど、換気を良くする。(換気が不可能な場所は避ける)
- ・参加者同士の着席の間隔が1メートル以上確保できる人数を収容可能として制限する。
- ・入口にアルコール消毒液を設置
- ・出入口の取手、ドアノブ、電気のスイッチ、テーブル、椅子(背もたれも)、蛇口等お堂、式場だけでなくトイレ、控室、休憩する場、焼香台、焼香炉等参加者が触れる可能性のあるものは全て消毒しておく。
(焼香台、焼香炉等も)
- ・焼香台は、導師、僧侶との間隔、最前列参加者との間隔はソーシャルディスタンスの2メートル以上取って配置する。

葬儀、法要を行うに当たって、三密を避けるために参加者人数を何人にしようか、場所はどこにしようかということが考慮のポイントとなります。

参加者が少ないに越したことはありませんが、広さ、換気状態で可能な人数は違ってきます。つまり、場所次第です。

ただし、自宅での葬儀、法要は、三密になりやすいので避けたほうがいいと思います。

緊急事態宣言中はどうだったか

5月26日に全都道府県に対して国からの緊急事態宣言が解除されました。解除前の首都圏の多くの斎場では、10人程度、一部斎場で15人、20人程度の少人数の葬儀を推奨していました。

このことからすると、基本的な考え方として、葬儀も法要も、もちろん場所にもありますが、まず20人程度の少人数であれば三密を防止して行えると考えていいのではと思います。

そして、国からの緊急事態宣言が解除、さらに東京都においても外出自粛、休業要請等の段階的な緩和がスタートしました。

葬祭、お寺については、元々休業要請がなされていましたが、葬儀を火葬のみにした直葬(火葬式)にしたり、法要を取りやめたり、葬儀をするにしても、通夜葬儀でなく1日葬のかたちで少人数での家族葬が行われてきました。

さて、今後はどうでしょうか。

三密を避けることから、できる限り少人数であればいいに違いありませんが、前述したかたちを厳守できる場所であれば100人ぐらいまでは行えると考えてもおかしくないと思います。

なぜ100人と申し上げたかと言いますと、既に踏み出した東京都の緩和措置「ロードマップ」のステップ1、2において、室内100人か

つ収容定員の50%までのイベント開催を可能としています。葬儀、法要はイベントとは別物ですが、参加者がエネルギーになるイベントが100人OKなら、100人までの葬儀、法要は可能と考えるのはおかしくないという考え方からです。東京都が緩和措置を検討するに当たって、感染症の専門家も含めて決めたものであるはずですが、感染病については全くの素人である私がガイドラインとするることは間違いではないと思っています。

第2波、3波が来たら（パンデミックに備えて）

なお、このコロナ感染拡大は、第2波、3波が来ると言われています。そのときに再度外出自粛、休業要請等が実施されることもあります。

その場合は、葬儀、法要においても人数としては再び10人程度、15人、20人と少人数で行うことを斎場等から推奨されることもあるかと思います。

要は、ワクチンが開発、普及するまでは、葬儀、法要のあり方は感染拡大状況によって変わるということです。

ただし、三密対策、手洗い・ウガイは今後皆様方1人ひとりが厳守すべきことは変わりません。

いずれにしても、葬儀をするに当たっては葬儀社と協議、法要においては僧侶と協議すれば、各方面の皆がいろいろと考え、感染防止対策をとったうえで行えると確信しています。

今後、コロナ下での葬儀を考えていただくに当たって

1. 火葬のみにした直葬（火葬式）の場合は、僧侶の炉前読経、お別れ時の花入れがありませんが、僧侶の炉前読経、お別れ時の花入れをプラス、さらに納棺前のメイクをお願いすれば、故人に対して葬式をせず火葬のみで申し訳ないという喪主、遺族の気持ちが薄らぐと思います。

2. 親族のみの家族葬かつ1日葬で行う。(必要に応じて後日お別れ会を行う)
3. 着席するのは親族のみで、他参加者は焼香後礼品を受け取ってお帰りいただく。(法話は最初にしてもらう)。
4. リモート(オンライン)葬儀で行う。

お堂、式場には親族のみとして、他参加者は各自宅等希望場所でオンライン配信されるモニター画面をみて参拝するかたちです。

- ・参加者同士の会話もできます。
- ・供花を送ることもできます。
- ・オンライン配信の装置がない場合はタブレット等を事前に送ってもらう(借り受ける)。焼香炉等も用意できない場合は借り受ける。

※コロナ感染対策においてだけではなく、

- ・遠方で参加をあきらめている。
- ・体が不自由で外出できない。

等の方も参加できます。

※ただし、このリモート(オンライン)葬儀は、請け負う葬儀社が装置整備、貸出体制が整ってないとできません。

そのことから、ぜひ今後の葬儀として葬儀社にリモート(オンライン)葬儀体制づくりをしてほしいと思っています。

4. 大人数になる場合は、式場を2部屋以上確保して親族のみ祭壇、棺安置のうえ焼香する部屋内に着席、他参加者は焼香後、モニター画面を設置した別室内に着席してお勤めを見届ける。炉前へは親族のみで、他参加者は出棺を見届けてお帰りいただく。
- 等があります。

新型コロナウィルス感染で亡くなれた方の葬儀は

お骨を受け取った後 (喪主様、ご遺族が濃厚接触者であられた場合は感染確認のため人との接触避けたあと)、お骨を安置しての葬儀(骨葬)を行いましょう。

追伸

感染防止だけを考えると、外出自粛して葬儀も法要も一切しないのがごもっともですが、弔いができずかつ仏様の教えを支えとすることができず心が傷ついてしまっては人間にとっては一番辛いのではないのでしょうか。

人々が英知を結集、知恵を出し合って、コロナウィルスと共生しながらでも生きていくことも大事ではないでしょうか。

人類学者である京都大学総長の山極寿一氏がテレビで、

「人類は弱みを強さに変えて生き延びてきた。不安を強みに変えて、人間同士がいかに協力して共感して生きるかをさせられている。これまで弱みを見せた時に、必ず乗り越える強みを発見してきた。

今回も、それが起こると信じています。」

とコロナウィルスについて、テレビで語っていました。

前向きな気持ちにさせられるのは、私だけでしょうか。

感染防止のための新しい生活様式を厳守したうえでの弔いはできるはずですし、すべきだと思います。

医療従事者の方々が、感染リスクを背負ってコロナ患者のために働いていることを思うと、私たちはこのコロナウィルスをむやみに恐れるだけでなく、それぞれがやるべき感染防止策を正しくして生活していく、つまり正しく恐れて生きていくべきだと思っています。

いまだに、人通りが少なくない街中でマスクを着用していない人、コーヒー店の店員さんがマスクを着用しないお客様とやり取りしている、多人数で接近して飲食している光景を私自身が目にしています。

コロナウィルスが唾液に多量にいるがわかったり、唾液のPCR検査が開始になったというのに思います。

唾液の飛沫が改めて危険だとわかってほしいです。

こうしたことは、感染防止の生活様式を守らないことです。私としては、今後のことも考えて、東京都でマスク着用義務の条例がで

きることを望んでいます。

私たちは、事故、自然災害、病気、いつ縁をするのか、いつ死ぬのか、明日のことはわかりません。今をご縁で生かされている身、すべきこと、今できること、やりたいこと等、感染防止のための生活様式を厳守したうえで、1日いちにちを大切にして皆苦(思うがままにならないという苦だらけ)のこの世を生きていくべきかと思います。所詮、できることしかできないのです。

これが、コロナウィルス感染を正しく恐れて生きていくということではないでしょうか。

そんな気持ちから、この私見でガイドラインをまとめてみました。

以上